

第 号
平成21年6月30日

在タイ国日本国大使館
特命全権大使 小町 恭士 殿

(社) シャンティ国際ボランティア会
会長 若林 恭英

日本NGO連携無償資金協力 事業完了報告書

平成20年5月28日付日本NGO連携無償資金協力贈与契約に基づく「伝統文化継承のためのノンフォーマル教育支援事業(図書館事業)」が、平成21年5月27日をもって完了いたしましたので、関係書類を添え、下記のとおり報告いたします。

記

1. 事業の実施期間： 平成20年5月28日 ～ 平成21年5月27日

2. 事業の実施成果(要約)：

(10～20行程度。「申請書に記載した期待する成果とその達成度」、「プロジェクトの自己評価(計画の妥当性、効率性(時間、費用)、有効性、インパクト、自立発展性)(定量的+定性的)」、「今後の方針」を記述して下さい。)

本事業において、対象難民の知識、経験、態度がより豊かに高められ、とりわけ子どもたちに対する教育環境が改善された。第三国定住政策によって例年人口減少が見られるが、対象3キャンプにおける全難民は65,707人(2009年4月現在、TBBC調べ)であり、本事業は幼児から高齢者までの幅広い年齢層の住民に対して、11の図書館を中心に読書推進活動及び伝統文化活動にアクセスする機会を提供してきた。とりわけ、伝統文化教室は楽器(4種)及び伝統舞踊に加え、一部のキャンプではポーカレン語及び織物の教室を実施した。また、伝統文化相互交流発表会、「難民子ども文化祭」をウンピラムキャンプにて実施、8つの民族の子どもたち80名が集い、内外に対する伝統文化活動の重要性をアピールすることができた。

しかしながら、第三国定住政策と各キャンプ人材状況によって、伝統文化教室の講師が見つからず、特に2つのキャンプで開講できない教室が多く見られた。その他にも予算執行額が下回る項目もあり、計画の妥当性には課題が残った。今後は、活動展開をもう少し詳細に予想し、更に予算組みのプロセスを丁寧に行う必要がある。時間及び費用のかけ方における効率性、有効性は認められるが、伝統文化に関する世代間ギャップが存在する上、キャンプ内に伝統文化維持・継承の課題を担う機関がなかったことも、本事業のテーマに関する社会的インパクトを低く留めていた。そんな中、ウンピラムキャンプに続き、メラキャンプにも「伝統文化委員会」が自発的に発足した。この2つのキャンプでは、伝統文化教室活動が継続・再開されており、こうした組織基盤の整備が多くの問題を解決し、自

立発展性に大きく貢献する。

今後、第3フェーズにおいては、この伝統文化委員会の体制強化を図りながら、次第に伝統文化教室活動の実施主体をシフトさせていくことが求められる。また、伝統文化委員会が整備されていないヌポーキャンプにも同様の機関が設置されるよう働きかけが必要。既存の図書館委員会と伝統文化委員会の連携や主体性を高めるための能力強化研修にも取り組み、事業運営の仕方に工夫を加えていく。

3. 日本NGO連携無償資金精算額： 3, 590, 680. 5バーツ

(契約額(供与限度額)より 585, 419. 5バーツの減)

4. 会計報告(事業資金収支表、資金使用明細書、支払証拠書写し)：

別紙のとおり

5. 外部監査報告書提出予定日：平成20年7月13日

【添付書類】

①会計報告関係

事業資金収支表 (様式4-a)

資金使用明細書 (様式3-a)

経費支払証明(証拠書台紙)(様式3-b)

銀行口座残高証明(または通帳写し)

②事業の成果(詳細報告書)

③事業内容説明写真

②事業の成果（詳細報告書）

（1）書籍購入（大人向け）／自己資金

毎月定期的に各図書館に図書を購入、年間通して1図書館当たり40冊の雑誌、ニュース、小説、教養書、リクエストに応じた図書などを配架してきた。キャンプによって利用度は多少異なるものの、一般的に大人の図書利用度は高く、もう少し種類、冊数を増やしてほしい、また子どもたちの声が気にならない読書スペースがほしいなどの要望も上がっている。年間計画・予算の組みなどの時期には考慮していきたい。

（2）書籍購入（子ども向け）／自己資金

タイ語絵本に関しては、年末に選定・購入し、年頭から順次、翻訳、翻訳ステッカー編集・貼り付けを終えていく。翻訳ステッカー貼り付け作業の一部は各キャンプの図書館員によって実施される。購入数は事務所ストック分も含めて4冊（カレン語用3+ビルマ語用1）x25ヶ所x10タイトル=1000冊である。年末までには各事務所経由でキャンプ内の図書館に順次配架される。本年度も同様にスケジュールに則って実施された。

（3）図書館修繕／申請額

1-5月の雨の降らない乾季に、各キャンプの図書館委員会が中心になって資材見積もり、搬入、修繕作業を実施しており、今期は11ヶ所（メラ：6ヶ所、ウンピナム：4ヶ所、ヌポ：1ヶ所）の図書館に対して工事を行なった。工事はいずれもスムーズに行なわれ、雨漏りのないように屋根材を入れ替え、床や壁の竹材も新しく張り替え、外壁や入り口、トイレの修理などが実施された。また、利用者の中でも比較的多い教員、生徒、学生にとっては、5月からの新学期に備えてリフレッシュされた図書館で、楽しく有意義な時間を過ごしている様子である。

（4）図書印刷／自己資金

絵本出版は、年間3タイトル、カレン語・ビルマ語各1000部を印刷した。2008年8月には「キツネの家族」を出版、次いで2009年2月には残りの2タイトル「かたつむり王子」、「父からの贈り物」が完成した。各キャンプの図書館には印刷が終わり次第随時配架し、図書館では読み聞かせしたり、子どもたちが同時に手にとって読み始めたり、さまざまな形で利用され始めている。

（5）伝統文化教室活動／申請額

事業年度を通して3キャンプにおける各教室の開催状況を下記のような表に示した。例年に比べて伝統文化教室の開催状況に偏りの多い年となった。第三国定住による人材流出が続いていることや、知識・経験のある人材は業務の掛け持ちが多く常に急がしいなどの理由もあり、伝統音楽、舞踊を教えられる人材の発掘、採用が低下している。また、キャンプによっては図書委員会や文化委員会メンバーもさまざまな業務を掛け持ちしているという事情もある。一方、子どもたちも学期中は学業に集中しており、土曜日を中心にしたコースでもなかなか参加できないという声もあった。この辺りの事情を鑑み、来期本事業の最終年では、活動をキャンプ内イベントの1ヶ月前の集中講座形式に変更、年に3回程度の実施する形をとることにしている。

詳細は別添資料の伝統文化活動実績データを参照されたい。

<ウンピナムキャンプ>

教室名	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
伝統楽器：タナキクロ	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
伝統楽器：ソートゥ	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
伝統楽器：カナ	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
伝統楽器：マンドリン	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
伝統舞踊	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ポーカレン語	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
伝統工芸（織物）	—	—	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—

※ ウンピナムキャンプは、比較的恒常的に教室を開講できた。特徴としては、新規の伝統楽器としてマンドリン（ウクレレ程度の大きさの楽器）が加わったこと、伝統工芸として織物教室が実施されたことがある。後者はKWO（カレン女性組織）と相談しながら試験的な形で実施、講師2名の下、参加者20名1人1枚のカレン伝統衣を織り、一定の技術を習得して修了した。継続をしなかった理由は、対象者が子ども・青少年を対象とするよりも成人女性が多くを占めたこと、織物などの継承は比較的容易に一般家庭でも継承しやすいこと、収入向上活動の要素が強くなっていることなど、本事業の活動としては優先順位が下がると判断したためである。

※ ウンピナムキャンプには2008年6月、キャンプ内自治組織であるカレン難民委員会の中に、「伝統文化委員会」が発足した。カレン難民委員会の会長であるワー・ティ氏自らが伝統文化委員会の長も兼任、弊会と協力してキャンプ内の伝統文化活動を盛り上げるための重要な基盤が整備された。

<ヌポキャンプ>

教室名	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
伝統楽器：タナキクロ	—	—	○	○	○	○	○	—	—	—	—	—
伝統楽器：ソートゥ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
伝統楽器：カナ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
伝統楽器：マンドリン	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
伝統舞踊	○	○	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○
ポーカレン語	—	—	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—
伝統工芸（織物）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

※ ヌポキャンプは、伝統舞踊は基本的に続けているが、昨年度同様、伝統楽器が講師不足によりタナキクロのみの開講となっている。8-9月には伝統的なスゴークレン語よりも、詩や歌が豊富なポーカレン語の教室を開催した。図書館委員会との相談により、まず、試験的に導入したいということで、学校の教室を借りて合計300名の生徒を対象に8週間の講座を実施した。今回は講師と生徒の空き時間と学校側にカリキュラムの状況によって集中講座となったが、カレン文化のエッセンスがたくさん詰まったポーカレン語は他のキャンプでも開始し、恒常的なサポート体制を作ることが期待される。

※ 3つのキャンプの中でもヌポキャンプはまだ伝統文化委員会設立の動きがない。今後の教室運営の担い手を確保し、他のキャンプと足並みを揃えていく意味合いもあり、伝統文化委員会の立ち上げには非常に期待をしている。今後も働きかけは積極的に実施していく。

<メラキャンプ>

教室名	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
伝統楽器：タナキクロ	—	○	○	—	—	—	—	—	○	○	○	○
伝統楽器：ソートウ	—	○	○	—	—	—	—	—	○	○	○	○
伝統楽器：カナ	—	○	○	—	—	—	—	—	○	○	○	○
伝統楽器：マンドリン	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
伝統舞踊	○	○	○	○	—	—	—	—	○	○	○	○
ポーカレン語	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
伝統工芸（織物）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

※ メラキャンプは前半、第三国定住などによる講師・生徒不足、伝統楽器の質の問題などが重なり、多くの教室を休講しなければならなかった。しかし、11月にはウンピアムキャンプに次いで「伝統文化委員会」メンバーを選出、同委員会を発足させた。その後、2月から各教室が一斉に復活、キャンプ内における自主組織が安定した活動の鍵を握っていることをあらためて確認した。同委員会は独自に文化ホールの建設にも着手しており、本事業の担い手を発展的に移譲すべき基盤として今後も重要な組織となることは間違いないだろう。

(6) 伝統文化相互交流発表会／申請額及び自己資金

当初メラキャンプを会場に想定していたが、7月に伝統文化委員会が立ち上がり、コミュニティ全体の伝統文化活動も比較的活発なウンピアムキャンプにホストをお願いした。2009年初頭より具体的な企画内容の提案、受入準備などすすめ、2、3月にはほぼ毎週文化委員会との打ち合わせ、ボランティアの研修会を重ねた。事業実施日は、3月31日及び4月1、2、3日の3泊4日で、イベント名は「難民子ども文化祭」とした。ウンピアムキャンプ内の子どもたち（中・高校生が中心）を中心にメラ及びヌポキャンプからも子どもたちを招待し、カチン、チン、モン、カレン、ビルマなど合計8民族80名が集う大イベントとなった。さまざまなゲーム、歌、創作活動、ピクニックなどを通して友情を築き、参加者のみで行なった「文化紹介の夕べ」では互いの文化を学び合い、最後にキャンプ住民一般に対して披露されたステージプログラムでは子どもたちの出し物に拍手喝さいが起こった。また、大人の民族グループの伝統音楽や舞踊も披露され、それもまたすばらしい時間となった。

民族文化の維持・継承という観点からも、実施期間は非常に短かったものの、参加者同士の非常に凝縮した時間があり、また関係者及びキャンプ住民に対しても十分アピールする機会となったことは確かである。詳細に渡る準備過程に対して少々辟易した感もあった文化委員会からも、イベント終了の際には「このイベントは毎年難民キャンプで継続するべきだ。来年のホストがいなかったらもう一度ウンピアムキャンプでやってもいい」とのコメントといただいた。

一点だけ残念だったのは、近隣のタイの少数民族のモン族の子どもたちの招聘が学校長の許可が下りずに土壇場でキャンセルになったことであった。事前の確認作業を綿密に行なうべきであったと反省している。

(7) 母と子のふれあい活動／自己資金

7月、ワークショップを実施、合計311名（メラ214名、ヌポ32名、ウンピアム65名）の参加者を得て、児童心理と絵本の意義、読み聞かせの仕方、図書館利用の仕方などを紹介した。そ

の後は絵本貸し出しが増加し、母親たちも子連れで図書館に来館する姿が見られる。ワークショップは年1回開催。

（8）人形劇活動／申請額

2008年10月はウンピラム、11月はメラ、12月はヌポでそれぞれ人形劇を上演した。演目は山火事の中で母親に命を救ってもらった白い象が、その後、みんなに山火事を伝えリーダーシップを発揮するという紙芝居「しろ」（かこさとし作）を原作とした。青少年ボランティアが中心となるこの活動では、はじめに30分から1時間程度の時間を使ってゲーム、紙芝居を行ってから、人形劇を実施。青少年ボランティアは各キャンプにつき1グループ20名前後で構成されているが、高校生、大学生も多く、勉強が忙しかったり、また第三国定住プログラムで主力メンバーが抜けたりと、練習や公演活動の調整が難しかったことも事実である。しかし、キャンプではこうした年齢に関わらず楽しめる企画が非常にすくないため、ステージ活動は好評を博した。

2009年は1月から5月にかけて各キャンプで人形劇活動を実施、とりわけキャンプ内の病院に入院している子どもたちを訪問した。フランスの医療系NGOであるAMIとの提携によるこの活動は子どもたちからも大変に好評で、AMIの専門家からも「子どもには食事や薬だけではだめ。こうした『心の栄養』が病気の回復に与える影響は計り知れない」と肯定的なコメントを頂き、ボランティアたちもますますやりがいを感じている様子であった。

（9）青少年対象活動／申請額

2008年9月はウンピラム、10月メラ、ヌポで青少年ボランティア対象に読書推進ワークショップを実施した。各キャンプ20名のボランティアと共に、読書推進に関わるゲームや読み聞かせの仕方、上記の人形劇「しろ」の演じ方の練習、高齢者や子どもたちを招待して試演も行った。ふだんは家に閉じこもりがちな高齢者も若者が演ずる人形劇に拍手喝さいするなど、世代間交流のよい機会となった。第三国定住で人員が随時変わっていくものの、子どもたちを中心にしたキャンプ住民の期待がボランティアたちの大きな励みとなっている様子である。

2009年は4月にメラ、ウンピラム、5月ヌポにて、読書推進ワークショップを開催、各キャンプ半部以上のメンバーが交替する中でも、年長のメンバーの指導もあって、ワークショップ自体もスムーズに行なわれた。

（10）図書館員・図書館委員会研修／申請額

通年、新しく入った図書館員に対してサービス前研修、既存の図書館員に対してサービス中研修などを随時行ってきた。また図書館、図書館委員との月例及び四半期会議はお互いが運営上の問題点を出し合い、解決法を探る上で重要な機会となっている。前述のウンピラムキャンプ、メラキャンプにおいて「伝統文化委員会」がキャンプレベルで立ち上がったことは本事業に大きくプラスの影響を与えており、今後の活動の提携や移譲に期待がかかる。今後も伝統文化活動に関する事項はこの「伝統文化委員会」に相談しつつ、同委員会メンバーがより主体性を持って伝統音楽・舞踊の維持継承活動の担い手になってもらえるよう関わっていく。

（11）図書館行事開催／申請額

2009年に入ってから、伝統文化教室及びイベントに備えて、カレンダー用衣装の購入、伝統楽器の修理・新規購入、DVD及びモニター購入を実施した。DVD及びモニターに関しては、盗難用の鉄枠の製作に多少時間がかかったが、各キャンプと交渉し、伝統文化教室活動で比較的高い利用度の高い図書館に設置された。ソフトに限りがあるため、本格的な活用はこれからになるが、

自分の民族のみならず、他の民族も理解できるような教材や具体的に教室活動に役立つソフトの提供に協力していきたい。

（12） 消耗品購入／申請額

消耗品に関しては、2008年6月から11月にかけては、UNHCRからの支援が承認されたため、本事業の経費として計上せず、2008年12月から2009年5月に発生した消耗品に関してのみ計上した。

以上